

## 保護者、担任、部活動顧問の思いがかみ合わず、連携がうまく進まなかった事例

キーワード： 保護者への寄り添い方(1)(2)

コーディネーション

相談系の焦り

この事例解説では、関係者の意識共有がうまくできなかったため、事態を悪化させた事例についてまとめました。

### 問題の概要

高校2年生のD男は、中学時代まではまじめで、陸上に一生懸命打ち込んできた。勉強には力を入れてこなかったが、成績はよい方で、陸上部の強い進学校に入学した。

1年生の冬に風邪をこじらせ、しばらく欠席した。登校は再開したが、体調不良を理由に部活動へもあまり参加しなくなった。

2年生になり、先輩や顧問に部活動に来るように働きかけられながらも、ほとんど行かなくなった。1学期末考査後は、腹痛を訴えてポツポツ休むようになり、無断早退もみられた。ゲームにも没頭し始め、家庭での勉強もしなくなってしまった。その頃に相談担当者は母親から直接相談を受け、以後、2週間に1回程度母親との面談を続けた。しかしD男は相変わらず欠席や遅刻、早退を繰り返していた。

### 対応の概要

#### 母親も一生懸命対応した

D男は、部活動に行かない理由や欠席、無断早退の理由を進んで話そうとしなかった。しかし母親は、「D男には、部の先生や先輩から、今まで休んでいて今頃何だ！と思われるのではないかという不安がある」「登校すれば比較的元気に過ごせる。登校さえすれば軌道に乗る」「目標があると頑張れる子。目標を持たせることが必要」と考えていた。

そのため、朝は粘り強く起こし、車で学校に

送って来たり、近隣の陸上選手に個人コーチを頼んだり、あるいはゲーム機を取り上げ、登校を返却の条件にしたりした。父親もD男とじっくり話し合って登校や部活動再開の約束を取り付けたりするなど、それぞれ一生懸命対応していた。

#### 担任や顧問もよかれと思いで対応していた

担任は、D男自身、陸上で伸び悩みを感じるとともに、学習習慣がないため、授業についていくのが大変になり、そうした状況から逃避していると思っていた。そのため、何度か面談して苦手科目の添削を受けるように勧めたり、部活動への参加を促したり、早退することはあっても欠席はしないように諭したりしていた。

部顧問は、D男は素質はあるが挫折経験がない。ちょっとしたつまずきでへこんでしまう。甘い言葉をかけて一時的に参加させても成長しないという見方をしていた。そこで、3年間部活動をやり通す覚悟を決めてから参加するように指導していた。

#### D男も何とか踏ん張っていた

D男は、留年しても学校はやめたくない。退学や転校はしたくないと考えていた。帰宅後や休日はゲームに明け暮れたり、遅刻や早退はするものの、1週間休み続けるようなことはなかった。定期考査も受験した。

両親には、「今はこうだけど、必ずちゃんとやるから」と言い、担任との面談の度に、しっかりやりたいという思いを示していた。ただ、母親が「学校をどうするのか」と詰問すると、激昂して物に当たることがあった。

## 相談係も一生懸命心を砕いた

相談係は、母親の安定とサポートを第一に考え、母親の思いを丁寧に受け止めようとした。母親は担任や部顧問には相談しにくさを感じ、関係が疎遠になりがちだった。相談係は、その中であって、母親の思いを担任や部顧問にうまく伝えようと腐心していた。

しかし、事態は好転せず、相談係は焦ってきた。自分が何とかよいアドバイスをしなくてはいけないという思いを強くし、母親との面談の度に、いろいろな提案をしていった。

### 実践のポイント

この事例の場合、相談係は、コーディネーターと母親の直接的援助者の二つの役割を担っています。このとき、どちらかの役割が行き詰まると、それをもう一方の役割遂行の中で解消しようとする場合があります。このことの可否より、対応に余裕がなくなることの方が問題です。

この事例の場合、相談係はコーディネーターとして、次のような行き詰まりを感じました。

「母親は、個性の強い担任や部顧問に話しにくさを感じている。私は両者の橋渡しをしなければ。でも、D男に対する理解や対応について、お互いの認識に違いがあって、相互批判的だ...」  
「担任と保護者、保護者と相談係といった二者間の面談は何回か行ったが、関係者が一堂に会しての会議が開きにくい。担任や部顧問は、まずD男や母親が変わらないと話しあっても成果は期待できないと思っている。母親は、会議では、先生方から一方的に責められることを危惧している。そのため集まりをもちにくい...」

こうした行き詰まりを打開するため、相談係は、母親の変容を図ろうと思いました。「母親の対応はどこか甘い」という思いも手伝って、面談の度に、母親に具体的な対応策を提案するようになりました。矢継ぎ早に「こうする必要

がありますね」「こうしてみましよう」と求めたのです。しかしそれは母親にとっては、「あなたが良くないからこうなっている」「あなたが変わるべきだ」と言われているのに等しいことでし

そこで、どうすればよかったか

### 母親を勇気づけ、ゆとりを持ってもらう

母親は、主体的に対応を考えて実行しています。たとえそれが教師の意図することと違っていたり、直ちにD男の変容に結びつかなくても、それが第一義的に問題ではありません。母親のかかわろうとする思いを勇気づけることが大切なのです。母親の頑張りやねぎらい、支持していくこと、対応策の提案は、小さなことを小出しにしながら、「このような対応も考えられますが...」と言って、母親に主体性を保ってもらうことがよかったと思われま

### 固定したパターン・悪循環を探す

問題の解決にあたっては、「問題は誰のせいで起きたのか」ではなく、「問題を継続させるパターンは何か」を考えます。この事例では「母親と担任」「母親と相談係」「相談係と担任」といった二者間協議でも、D男に対する母親、担任、そして部顧問からの働きかけも、違う方向を向いています。みんな間違っただけを言っただけではないし一生懸命なのですが、同じ方向を向いてD男にかかわっていないため、効果のない対応パターンが続いてしまっています。

そこで、「有効な対応策」より、まず「同じ方向で援助する」形を作ることを優先させます。みんなで母親の安定と勇気づけを図ることも、父親とD男の約束を実現・実行させるための役割分担を決めていくのもその一つと言えま